

共立女子大学文芸学部報

共立女子大学文芸学部報
第141号
発行日 2022年4月18日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 藤田岳久
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuh@kyoritsu-wu.ac.jp

学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みいただけます。



第141号	主目次
第1面	トップエッセイ 美の旅 大学随想 特集
第2面	文芸学部を選んだ、一番の決め手はこれだ!
第3面	卒業生コラム 心象点描
第4面	各セクションから

〈今号の一言〉
「あなたは最近、深呼吸をしましたか？」
(近藤)

大学随想

「教授が手術をする時、常に助手に指名される外科医が若くても手術がうまくなるように……(塩野七生「イタリアだより」)。
戦後イタリア政界で何度も首相や閣僚を務めた大物政治家を論じた文章の一節である。塩野さんのかつての配偶者はフィレンツェ大病院のお医者さんだったから、こういう表現になったのだろう。
筆者はもとより政治家でも外科医でもないのだが、助手を八年務めて、学生とは違う立場で恩師の指導を受けたので、これはわかる気がする。研究や授業のやり方はもちろん、学生との接し方、研究室や学会の運営、出版社や放送局との付き合い、偉い先生方の隠れた素顔など、大学教員のいろはを实地に学んだのは今に至るまで有難い財産となっている。
それがうまくなったかどうかは、才能の問題もあるので心許ないが、真似で通して何とかやってきた。「まねび」は学びの元と思えない。そして未だに真似しきれないままに、この仕事も残す所わずかになってきた。
フランスの超エリート校である高等師範学校に留学した先生に教わったこともあるが、その卒業生で最も優秀な者は、栄達を求めたよりも母校に残って自分の受けた教育を次代に伝える道を選ぶと聞いた。
これまた我が身になぞらえるのはおこがましいが、やはり自分が受けた教養をこよなきものとして伝えることが最上であり、それしかできないと思ってきた。
だから、やたらと改革を唱える人は、ろくな大学生活を送っていないのではないかと、こんなダメだという経験しかしていないのではないかと気の毒になる。そういう人たちに任せておいて、大丈夫なのだろうか。
(鈴木国男・教授・劇芸術)

「学部報」を読む男を見た私

阿部 由香子

地下鉄車内にて

十年ほど前になるかもしれない。たった一度だけ地下鉄の中で『文芸学部報』を読んでいる方を見かけたことがある。そこそこ混んでいる車内でスーツを着た勤め人らしき男性が座席でタブロイド紙を読むように顔の前に広げていた。吊り革につかまって立っていた私は紙名をしっかりと確認したので間違いない。私は読んでいない男性から目が離せなくなってしまう。

（うわ、本当に学部報が読まれている！ しかもかなり熱心に読んでくださっている。失礼ですが保護者の方でしょうか？ お父様ですか？ 誰のお父さん？ 私の鞆にも同じもの入ってます！）
衝撃と嬉しさと気恥ずかしさと興味とが私の心の中で最高潮に達したものの、「あの方が読んで

いるアレ、うちの学部報なんです」と隣の人と興奮を分かち合うことが出来るわけもなく、一人で顔を紅潮させて降車した。きつとただの挙動不審の乗客に見えただけではない。
気になることを目にしても、それを誰にも言えずに終わることはよくある。とりわけ今の時代は声にださずSNSでつぶやくことにもなるのだろう。
笑ってはいけない悲劇
こんなこともあった。
スーパーへ買い物に出かけた帰り道で信号が変わるのを待っていたところ、私の前に野球部の試合帰りとおぼしき中学生が立っていた。ジャージの背中に「WAS EDA」の文字が踊っていて格好いい。ただ、視線を下げるとジャージのズボンが後ろ逆さではないか。「田中」という名前の縫い

取りが腰のあたりにあってチグハグな後ろ姿に思わず笑いがこみあげてきた。
この時は一人ではなく隣に中学三年だった娘が立っていたのでヒソヒソ声で「見てー」と耳打ちした。ところが娘は聞こえていないかのように知らんぷりである。家に着くと烈火のごとく怒り、人の失敗を笑うとはなにごとか、そんな人間が自分の母であることが悲しいとまで言って泣き始めたので驚いた。
これほどまでに最近の十代は周囲に気をつけて生きていくのかと実感すると同時に心配になった。
「失敗を馬鹿にして笑ったのではない。誰でも身に覚えがあるうっかりした失敗だからこそ、みんなで笑いとばしてあげるのだ」と娘には伝えたが、釈然としない顔をしていった。

「大豆田とわ子と三人の元夫」

昨年の春に放映された坂元裕二脚本のテレビドラマの第1話は、主人公の大豆田とわ子（松たか子）がジャージ姿で歩く場面が始まった。シナリオブック（「大豆田とわ子と三人の元夫1」河出書房新社）には冒頭のシーンが次のように書かれている。



Norman Rockwell『DOUBLE TAKE』（「ポスト」を読む少女）
1941年3月1日『サタデー・イブニング・ポスト』誌カバー画
（『ノーマン・ロックウェルカバー画集』2020年玄光社）

その要因はきつとたくさんあるのだろうが、一つにはいわゆる「全知視点」でゆるく語るナレーションが功を奏したのではないかと考えている。
実際、主人公とわ子の台詞はともも少ない。特に職場では社長として軽く咳をしただけでも空気が変わってしまうため、「社長の咳払いにはパワハラになる。そもそも社長になんかなるつもりはなかった」と嘆く心の声もナレーションで処理されている。
また、「●●大豆田とわ子」と三人称でNの声によって語られているにもかかわらず、とわ子自身が自分を遠くから眺めて語っているような感覚さえおぼえるのである。
シナリオと戯曲を執筆する「ドラマ創作」の授業を長年担当しているが、学生の作品にもM（モノログ）やN（ナレーション）が多用される作品が増えている。MとNが多いと説明的になるので控えるように指導してはいるものの、学生の身体感覚や生活スタイルが変化してきた影響も少なからずあるのだろう。

私たちの中の「私」

自分が目にした情景や出来事と心のうちに湧き上がった感情について語ることは自体はシンプルな表現方法で何も特別なことではない。
例えば、芥川龍之介「蜜柑」で「私」が汽車の中で目にしたみずぼらしい小娘のことと彼女を見ていたうちに自分の心持が大きく変わったことを語った物語も、ノーマン・ロックウェルが街中の光景を写し取った作品も「私」の視線から始まっている。そして語り手である「私」は対象と同じ高さの視点で捉えた出来事を読者や観衆である「私たち」と共有できることを信じて物語を送り出しているのだ。
時として物語は内容の面白さよりも誰と共有できるかが大切な場合もある。「文芸学部報」を読んでいたお父さん（じゃないかもしれない）は娘（じゃないかもしれない）が学ぶ文芸学部のことを知って何を思っていたかまでは分からない。真剣な顔で読んでいたことだけは記しておきたい。
(教授・劇芸術)



筆者撮影

美の旅

村井華代

パレスチナ西岸・ベツレヘムにあるキリスト聖誕教会。コンスタンティヌス帝の時代、救世主が生まれたとされる洞窟（厩は小屋ではない）の上に建てた堂が始まり。宗教的荘厳というよりは、世界中からやって来る人々の熱気でお祭りのような雰囲気。
(教授・劇芸術)

ト書き部分で描写されるとわ子の様子は松たか子が巧みに演じ、そこにドライで早口の端的なナレーション（伊藤沙莉）が繰り返し重ねられ、視聴者はとわ子の日々の暮らし、職場での苦労、ついでにない日の出来事、ふと思いつく過去の記憶など、彼女をめぐる物語に引き込まれていく。
ハウスメーカーの女性社長で、三回も離婚している主人公の生活はちっとも身近なものではない。にもかかわらず、今の私たちの息の仕方を写し取っているような同代性を感じた。

「私」が汽車の中で目にしたみずぼらしい小娘のことと彼女を見ていたうちに自分の心持が大きく変わったことを語った物語も、ノーマン・ロックウェルが街中の光景を写し取った作品も「私」の視線から始まっている。そして語り手である「私」は対象と同じ高さの視点で捉えた出来事を読者や観衆である「私たち」と共有できることを信じて物語を送り出しているのだ。
時として物語は内容の面白さよりも誰と共有できるかが大切な場合もある。「文芸学部報」を読んでいたお父さん（じゃないかもしれない）は娘（じゃないかもしれない）が学ぶ文芸学部のことを知って何を思っていたかまでは分からない。真剣な顔で読んでいたことだけは記しておきたい。
(教授・劇芸術)

「教授が手術をする時、常に助手に指名される外科医が若くても手術がうまくなるように……(塩野七生「イタリアだより」)。
戦後イタリア政界で何度も首相や閣僚を務めた大物政治家を論じた文章の一節である。塩野さんのかつての配偶者はフィレンツェ大病院のお医者さんだったから、こういう表現になったのだろう。
筆者はもとより政治家でも外科医でもないのだが、助手を八年務めて、学生とは違う立場で恩師の指導を受けたので、これはわかる気がする。研究や授業のやり方はもちろん、学生との接し方、研究室や学会の運営、出版社や放送局との付き合い、偉い先生方の隠れた素顔など、大学教員のいろはを实地に学んだのは今に至るまで有難い財産となっている。
それがうまくなったかどうかは、才能の問題もあるので心許ないが、真似で通して何とかやってきた。「まねび」は学びの元と思えない。そして未だに真似しきれないままに、この仕事も残す所わずかになってきた。
フランスの超エリート校である高等師範学校に留学した先生に教わったこともあるが、その卒業生で最も優秀な者は、栄達を求めたよりも母校に残って自分の受けた教育を次代に伝える道を選ぶと聞いた。
これまた我が身になぞらえるのはおこがましいが、やはり自分が受けた教養をこよなきものとして伝えることが最上であり、それしかできないと思ってきた。
だから、やたらと改革を唱える人は、ろくな大学生活を送っていないのではないかと、こんなダメだという経験しかしていないのではないかと気の毒になる。そういう人たちに任せておいて、大丈夫なのだろうか。
(鈴木国男・教授・劇芸術)

【資格もほしい】

■もともと私は芸術を学びたく、両親は資格を取ってほしいというので、両方できるから。

■教職免許が取れるから。(2・TM)

■国語科の教員免許を取得できる学部だったから。(2・NY)

■国語の教職免許を取りたかったから。(1・UY)

■スポーツ紙の編集者になりたいというので、幼い頃から好きだった国語の先生の夢も捨てられず、どちらも学べるから。(1・SM)

【立地・キャンパス・就職】

■立地・設備・環境が良いから。(1・FS)

■駅から近いから。(2・IH)

■都内にあったから。(1・TR)

■立地が良かったから。(2・TY)

■他大の学生が、共立の文芸学部という学部をどの程度、知っているか、また、どんなイメージを抱いているか、アンケート調査を行ってみたい。

■都内にある共学の大学三校で、計二四〇名の学生から回答を得た。なお、調査にあたっては、非常勤の長沼英二先生と若荷田先生にも協力いただいた。

■回答者の内訳として、学年では1年生が一五三名と六割以上で、2年生が四七名、3年生が三三名、4年生が五名、不明が二名である。学部では、法学部が八九名、商学部が六三名、文学部が三二名、理工学部が二九名、経営・経済学部が二五名、情報学部が二名と、多岐に及んでいる。なお、ご時世なので、男女の別は問わなかった。

■質問項目は、次のとおり。Q1 「文学部」ではなく「文芸学部」という名の学部が日本の大学にあることを知っているか？

【期待して】

■私の好きなものが近くにたくさんあったから。(1・MA)

■京王線住民なので、電車一本で来られる神保町という立地の良さから。(2・TY)

■神保町という立地に惹かれたから。(1・IN)

■古本に囲まれた街で本や言葉について学ぶことができるのが魅力的だと思ったから。(1・NK)

■地方公立高校の生徒としては、学校のきれいを優先したから。(1・OM)

■せっかくならキャンパスとトイレがきれいな大学が良かったから。(2・TN)

■寮がキレイだから。(2・IT)

■就職先や就職率が良かったから。(1・IY)

■合格した大学の中で、就職のサポートや周りの評判、立地が一番良いと思ったから。(1・HY)

【期待して】

■学びたいことが定まっていなくて、文芸学部なら自分が本当に学びたいことを見つけていることができると思ったから。(2・HN)

■将来に悩んでいたもので、自分の興味のある分野を自由に取ることができると文芸学部で惹かれたから。(1・SM)

■具体的にやりたいことが決まっていなくて、とりあえず幅広く学べる学部だったから。(3・AK)

■とくにやりたいことも将来の夢もなく、今後やりたいことが見つけられるように、色々な分野を学びたいと思ったから。(2・YA)

■自分自身の興味に自信がなく、多様な選択肢があって、しっかりと自分の興味を見極められると思ったから。(2・KM)

■もともと理系にいて医療関係の仕事をめざしていたが、高校になじめず転校した先の担任の先生から文芸学部を勧められ、他にもやりたいことが見つけられると思ったから。(1・KA)

■ある意味、すごく専門的ではないので、何にでもなれそうと思ったから。(3・FI)

■興味のなかった学部だったけど、今はやりたいことがこの学部で見つかった。(4・KY)

■Q1の回答は、「文学部」と「文芸学部」の両方を知っている人が多かった。Q2は「文学部」を知っている人が多かった。Q3は「文学部」を知っている人が多かった。Q4は「文学部」を知っている人が多かった。Q5は「文学部」を知っている人が多かった。

文芸学部 その知名度とイメージを調べてみました。

■以下、質問順に集計結果を示す。まず、Q1であるが、知っている人が六四、知らないが一七六という結果となった。じつに、七割以上の学生が「文芸学部」という学部名さえ知らないということである。

■Q2はQ1をふまえた質問であるから、予想されることではあるが、知っているのは、六四名中、わずか一八名であった。全体数から見れば、一割にも達しない。

【オープンキャンパスで】

■オープンキャンパスで感じた大学の雰囲気良かったから。(1・IA)

■体験授業が面白かったから。(2・TK)

■体験授業を通して、文学作品をただ読むのではなく、様々な教養を身に付け、結果、それが文学作品を読むことにつながってゆくことを知ったから。(3・IK)

■他に行けるところがなかったから。(1・KF)

■他の大学受験が全滅で、文芸学部しか合格できなかったから。(3・NY)

■受かった大学のうち偏差値が高いほうだったこと、お嬢様すぎない女子大だったから。(2・NY)

■自分が入れる大学・学部の選択が限られていたから。(3・KS)

【現実問題として】

■指定校推薦が取れる大学・学部の中で、一番家から近かったから。(2・KY)

■選択肢が国際か文芸しかなくて、英語が苦手だったから、自動的に。(3・OM)

■自分のレベルとして行けるのが共立の国際か文芸で、文芸のほうが面白いと思えることが見つけれられるのではないかと思ったから。(1・IH)

■フイリング。(2・TK)

■受験した時にピンときたから。(1・IR)

■女子大に通っているとどうもモテると聞いたから。(2・YA)

■受験科目で、英語現代文古文を選びたかったから。(1・FH)

■伯母が文芸学部の卒業生だったから。(2・YM)

■シンプルに中高が共立だったのでエスカレーター式でそのままあがったから。(3・NJ)

【こんなもあり】

■文化の集中している東京に、秋田出身の私はともかく出たかったから。(1・KY)

■共立女子大学のPRに来た方の人柄の良さに惹かれたから。(2・HC)

■大人なんて嫌い、死んでしまいたい、そう思っていた私にもう一度生きる希望を与えてくれる場所、そのくらいこの学部が好きだったから。入試で四回落とされても、補欠合格した。(3・NM)

■「好きだろ」がきらいだろ「が、きみという一人の人間に学生のとくに読んだ長田弘の『深呼吸の必要』。散文詩である。本の奥から取り出し、まず後記を読み返してみた。

■「言葉を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そうした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちどまって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉づかせる。

■「好きだろ」がきらいだろ「が、きみという一人の人間に学生のとくに読んだ長田弘の『深呼吸の必要』。散文詩である。本の奥から取り出し、まず後記を読み返してみた。

■「言葉を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そうした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちどまって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉づかせる。

■「好きだろ」がきらいだろ「が、きみという一人の人間に学生のとくに読んだ長田弘の『深呼吸の必要』。散文詩である。本の奥から取り出し、まず後記を読み返してみた。

■「言葉を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そうした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちどまって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉づかせる。

■「好きだろ」がきらいだろ「が、きみという一人の人間に学生のとくに読んだ長田弘の『深呼吸の必要』。散文詩である。本の奥から取り出し、まず後記を読み返してみた。

■「言葉を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そうした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちどまって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉づかせる。

■「好きだろ」がきらいだろ「が、きみという一人の人間に学生のとくに読んだ長田弘の『深呼吸の必要』。散文詩である。本の奥から取り出し、まず後記を読み返してみた。

■「言葉を深呼吸する。あるいは、言葉で深呼吸する。そうした深呼吸の必要をおぼえたときに、立ちどまって、黙って、必要なだけの言葉を書きとめた。そうした深呼吸のための言葉が、この本の言葉づかせる。

心象点描

深呼吸

近藤 壮



猫が好きだ。物心ついたときから、私の傍らにはいつも猫がいる。いまもパソコンに向かっている横で、丸くなっている。ときたま、むくくと起きて、前脚をぐーっと伸ばし「猫ストレッチ」のポーズ。そのあとは、決まって深呼吸のような大きなあくび。そういう、人間さまはしばらく深く深呼吸をしていない。「あなたは最近、深呼吸をしましたか？」日々せわしなくしている私へそんな問いを投げかけているようだ。マスクの欠かせない生活ではなおさら、青空の下での目いっぱい深い呼吸なんて、遠い昔話になりそうである。ゆっくりと息を吸い込み、そして吐く。こんな単純な動作だけで、不思議と心が落ち着く。深呼吸が自律神経や代謝機能にも影響がありそうなのはなんとなくわかっている。でも全然できていない。「深呼吸をするには、何をしようとも、必ず手をとっている横で、傍らの猫が再び「伸び」をして大きく息を吸い込んだ。」人間さまよ。深呼吸をして。深呼吸が必要なのだ。この戯文を書き終えようとしている横で、傍らの猫が再び「伸び」をして大きく息を吸い込んだ。深呼吸をして。深呼吸が必要なのだ。この戯文を書き終えようとしている横で、傍らの猫が再び「伸び」をして大きく息を吸い込んだ。深呼吸をして。深呼吸が必要なのだ。この戯文を書き終えようとしている横で、傍らの猫が再び「伸び」をして大きく息を吸い込んだ。

（准教授・美術史） 挿画も筆者

